第 5 回　「飢餓の現場に本当に必要なこと」

日時：6 月 8 日（水）　午後 7 時～午後 8 時 30 分
会場：龍谷大学　大阪梅田キャンパス　研修室
講師：折居　徳正
所属：公益社団法人 日本国際民間協力会 事務局長
URL http://www.kyoto-nicco.org/

第 5 回の講師は公益社団法人日本国際民間協力会（以下、NICCO）で事務局長を務めている折居徳正さんです。折居さんは 2002 年に NICCO の職員になり、アフガニスタン・ヘラート事務所駐在を経て、イラク難民支援やハイチ地震の緊急災害支援に従事しました。事務局長就任後は、京都本部にて組織運営と人材育成に尽力し、今回の東日本大震災支援では発生直後から現場で陣頭指揮を執っています。

講座概要

NICCO は 2005 年からアフリカのマラウイ共和国（以下、マラウイ）で飢餓や貧困問題の解決のための支援活動を続けています。支援を推進する際、NICCO は“包括的な村落開発”を一つの指針としています。これは、飢餓や貧困の原因を把握し、包括的に地域の開発を進め、問題の根本的な解決を目指すものです。講座では、折居さん自身が関わってきたプロジェクトの実施例が提示され、現地で必要な支援活動について述べられました。

アフリカの抱える問題

第二次世界大戦以降、次第にアフリカ諸国でも独立の機運が高まり、1960 年代には多くの植民地が独立を成し遂げます。しかし、植民地時代が長く政治文化が未熟であり、結果として多くの独立政権が樹立しました。また、列強諸国による生活圏・文化圏を無視した国境策定も独立後の不安定要素となりました。長期にわたって列強の原料供給地に甘んじていたため、経済基盤が脆弱であることも問題です。多くの国がモノカルチャー経済に依拠し、作物の収穫や価格に変動が生じた場合、国の経済自体に大きな影響を及ぼします。未成熟な政治や度重なる内戦、虚弱な経済構造の問題と並行し、干ばつの発生やマラリア・HIV/AIDS といった感染症の蔓延、乳幼児の死亡率の高さ、平均寿命の短さといったこともアフリカの抱える現実です。

マラウイを支援先として選択

マラウイはアフリカ南東部に位置する人口 1,570 万人の小さな国です。NICCO が支援先としてマラウイを選択した理由は、紛争がなく治安が安定している点、アフリカでは比較的小さな国土（118,000km^2、北海道と九州を合わせた面積）の中に、村落が密集して存在し、移動などの面でも比較的容易に地域の開発に繋がる支援が可能と考えたからです。しかし、支援を行う上で、最も重要な判断は、その国の抱える問題が“支援を必要とする状況”であるのかということです。

マラウイの一人当たりの GNI（国民総所得）は 780 ドル、213 カ国中 206 位（世界銀行、2009 年）であり最貧国の一つといえます。また、NICCO がマラウイを支援先として選択した当時、干ばつによる食料問題だけで

なく、保健衛生上の数々の課題も抱えていました。平均寿命が短く、5 歳未満死亡率が高いことに加え、感染症の蔓延も懸案事項の一つでした。例えば、当時マラウイの HIV/AIDS 患者数は、アフリカの中で 10 番目に多く、成人人口における陽性率は 14.2 パーセント（日本は 0.1%）*に達していました。

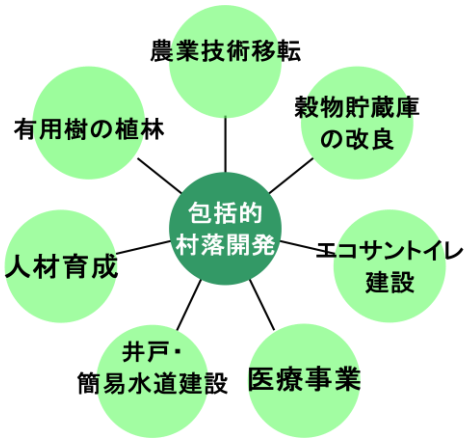
NICCO はマラウイの抱える問題の解決に向けて、まず、食料と生活用水の確保、マラリア・HIV/AIDS をはじめとする感染症の予防、不衛生なし尿処理対策の各分野を包括的に改善し開発していく必要があると考えました。

* “Report on the Global HIV/AIDS Epidemic 2004”, UNAIDS（国連合同エイズ計画）, 2004.

NICCO の包括的村落開発プロジェクト　―マラウイの事例―

NICCO が上述の問題を解決するに当たり実践したプロジェクトは次の 5 点です。①農業技術移転による収穫量の増加。②エコサントイレ（ecological sanitation toilet）を導入し衛生面の向上を図るとともに、便と尿を再利用した肥料の生産。③井戸掘削によって、生活用水の確保と女性の労働を軽減。④マラリア対策として蚊帳の普及、HIV/AIDS 対策として性感染症や母子感染予防講習会の開催、HIV 検査を含めた妊婦検診の実施。⑤地域の収入創出と生活の自立に向けた樹木の植林、といったプロジェクトです。こうしたプロジェクトを並行し、相互に関係性を持たせることで、包括的な村落開発が可能になります。

NICCO の考える包括的村落開発



図：NICCO 作成

折居さんは、一つの問題について対策を施行するのだけではなく、国や地域の状況を把握した上で、総合的に支援を行う包括的・総合的な村落開発の必要性を指摘します。例えば、マラウイでマラリアが蔓延する原因は、食事をトウモロコシに頼るため、慢性的な栄養不足にあることも一因です。十分な栄養を取れる状況と衛生な環境が整わなければ、医者や薬を送ったところで問題の根本的な解決には至りません。

また、一つの支援に特化した場合、それが頓挫した時、開発自体の停滞が余儀なくされます。支援のリスク分散を行うことも包括的村落開発を進める理由の一つです。こうした活動の成果を重視するのには、人々に達成感を持ってもらうことによって、地域の問題解決や生活自立に向けた長期的な視野と積極性を促す意味もあります。

エコサントイレの導入を“あげるだけの支援”ではない取り組みに活かす

現在、NICCO はエコサントイレを積極的にマラウイに導入しています。このトイレは便と尿を分離し農業用の肥料として再利用するシステムとなっており、高額な化学肥料を購入できない小規模農家にとって利点が多いのが特徴です。また、前日本大使が、マラウイ政府へエコサントイレの普及による衛生化と土壌改良の必要性を提案したことも背景にあります。し尿を農業に利用する東アジアの農業文化は当初現地の人々から拒否されました。しかしその肥料を使って丈夫に育った樹木や畑の収穫は収入の創出に結びつき、結果として生活の自立を助けます。また、こうした成果を出すことによって NGO との信頼関係も構築されます。プロジェクトを浸透させるには、長期的な支援体制と忍耐力を要しますが、単なる一時的、一方的な支援で終わるのではなく、人々の問題解決能力を培い自立に繋げることは NICCO の目的とする支援の在り方です。

NICCO を含む日本の NGO には他の支援国にはない「同じ目線で一緒に」という視点があり、だからこそ、過酷な状況の中でも成果を出してきたと折居さんは述べられました。そして、日本人特有の持続的なきめの細かい支援が、アフリカでも必要とされていることも指摘されます。私たちが出来るアフリカ支援は、まだ沢山残されているのではないでしょうか。